

ダルニー通信

078
2016
SUMMER

02-03

特集

7月よりACジャパンの CMや広告がスタート

04-05

ラオス・カンボジアの奨学金

06

タイの元奨学生

7

ラオス少数民族

8

自転車プロジェクト

10

ネットフレンドシップ

12

MS&ADコンサート

13

三菱商事の支援活動

14

タイ料理レシピ

15

私の特別教育基金

16

Study For Two旅行

18

「板倉ラオスの会」旅行

20

少数民族プロジェクト

ACジャパンから 支援団体の指定を受けました

TVで「えーし〜♪」のナレーションと「ACジャパンはこの活動を支援しています」と表示したCM（コマーシャル）をご覧になったことがあるでしょう。

昨年9月、普段は静かな民際の事務所がにわかに騒がしくなりました。なにごと?! ACジャパンから、サプライズのメールと連絡が飛び込んできました。審査の結果、今年度（2016年度）7月からスタートする団体支援キャンペーンに民際センターが指定されたとの報告でした。5年前から支援団体の申請をしておりましたが、やっと実現の運びになりました。

ACジャパンには「全国キャンペーン」「地域キャンペーン」「支援キャンペーン」の3つの広告活動があり、今回、民際センターが選ばれたのは「支援キャンペーン」です。多くの市民が参加し、その支援結果が多くの市民に還元される公共活動をしている団体が対象で、具体的には以下の問題に取り組む団体が支援対象となります。

1. 国民の生命、健康、安全に関わる問題
2. 国民の将来に深刻な事態を引き起こす問題
3. 海外の人道的問題

2015年度は9の団体が選ばれ、そのうち、NGOが対象となる上記3の「海外の人道的問題」には2団体が選ばれています。

ACジャパンのTVコマーシャルは15秒と30秒なので、ダルニー奨学金に絞り、その特長である「1対1の顔の見える支援」を訴えることにしました。

来年（2017年）に創設30年を迎える民際センターは、5カ国の子どもたちに一人でも多く奨学金を提供するため、団体の知名度とダルニー奨学金の存在を高めることが課題です。ACジャパンのキャンペーンは2年間です。1対1の顔が見える教育支援「ダルニー奨学金」を表現した広告がTV・ラジオ・新聞・雑誌・ポスター（電車中吊り）等で紹介されます。お楽しみに！

● AC Japanに申し込んだ理由

ACジャパンに申し込んだ理由は、ダルニー奨学金の支援者数の激減にあります。2007年をピークに1万人を超えていた支援者が急激に減少して2013年度には5,000人を切り、その後も減少傾向は止まらず、2015年度は3,419人になりました。その間の日本の寄付総額はどのように変化しているのでしょうか？ 2009、2010年の寄付総額は5,000億円前後で推移し、2011年は東日本大震災で1兆円を超え、2012年は7,000億円に減りましたが、以後7,000億円台を微増しながら推移しています。つまり、この間、寄付市場は5,000億円から7,000億円に拡大しているのに、民際センターへの寄付は減っている、と言えます。この原因は1つではなく、さまざまな要因が考えられますが、新規支援者も大幅に減っていることから「民際センター」または「ダルニー奨学金」の知名度が足りないということは明らかです。

今年7月から
TV、ラジオ、新聞等で
広告されます



AC Japan のTV コマーシャルに
登場するラオスの少女



テレビコマーシャルの撮影風景。
ドナー役は女優・モデルの佐古麻由美さん

AC Japanの支援キャンペーンでは、テレビ、ラジオ、新聞、雑誌で数億円相当の広告を提供してくれます。AC Japanの広告を見て (聞いて)、「ああ、東南アジアの子どもたちを1対1で支援している、あの奨学金ね」と多くの方に言ってもらえるような広がりを期待しています。



● 弊センター理事長 秋尾晃正のコメント

「支援者の方は、現地から送られてくる奨学生の写真と証書を見て、自分はこの子を支援しているということと、奨学生が自分で人生を切り開いていくスタート台に立ったことを実感するのではないのでしょうか。その2つの実感が、支援する側にも大きな喜びや期待をもたらしているのではないかと想像します。

ACキャンペーンを見たり聞いたりした多くの方がダルニー奨学金の支援を始め、そして支援の手ごたえを実感していただき、それが国際協力の関心のさらなる高まりにつながることを切に願っています」

AC ジャパンとは

公益社団法人 ACジャパン

「広告を通じて様々な提言をしていきたい。」そんな思いから1971年、ACジャパンの活動は始まりました。当初114の会員社でスタートし、現在ではおよそ1000社の規模に成長しています。

私たち ACジャパンは、その時代時代の問題点を考え、メッセージを発信する広告キャンペーンを展開しています。「公共マナー」「環境問題」といった普遍的なテーマ、「子どもの自殺防止」「いじめ」など世相を反映したテーマ、公共福祉活動に取り組んでいる団体を支援するキャンペーン、大災害が発生した時の臨時キャンペーン、あるいは国境を越えた国際的な共同キャンペーンなど、社会がその時もっとも必要としているメッセージを多くの人の心に働きかけてきました。

ACジャパンの活動は、民間の企業と団体が協力して運営しており、社会にとって有益なメッセージを広告という形で発信している CSR 活動です。

世の中を少しでも良くしたい。ただそれだけのために、私たちは今後も活動を続けてまいります。

カンボジア・ラオスの子どもたちの教育と生活

ダルニー奨学金の選考基準の最優先事項は「貧しさ」で、より貧しい生徒に奨学金に提供されます。その次に「勉強する意欲」が来ます。昨年度、申し込みをしている他の生徒と比べ、家庭の経済レベルがやや高いとして奨学金をもらえず、奨学金がないまま中学校に就学した生徒を2人紹介します。昨年度、奨学金をもらった生徒は、この2人の生徒よりさらに貧しいということになります。

カンボジア | 昨年度の奨学金申請に落ちた中学生

祖父と兄・姉のわずかな収入で生活

15歳のブットはこの年齢にしてようやく中学に就学できました。これまで中学校に行けなかったのは、父が行方不明で母は精神病を患ってあまり仕事ができず、祖父が農作業をして得ているわずかな収入と兄と姉からのわずかな仕送りで生活しなければならない家庭だったからです。

ブットは4人きょうだいの末っ子で、一番上のお兄さんは死亡。経済的理由で次兄は高2で中退、お姉さんは中3で中退。お兄さんもお姉さんも共に家を出ました。二人とも働いており、自分の生活が厳しいながらも、ごくわずかな金額の仕送りをしてくれます。平日は家族のために家事をし、休日は祖父と2人で働いています。ようやく中学校に通い始めました。奨学金を申請しましたがもらえず、四苦八苦しながらの通学ですが、生活は苦しく、果たして卒業まで通い続ける事ができるかわかりません。



母子家庭で5人きょうだい、不安定な収入

もう一人の中学生はサット。14歳で中2です。母子家庭で5人きょうだいの4番目。お父さんは4年前に死亡し、お母さんが近所で日雇いの仕事で収入を得ていますが、1日400～500円程度で、しかもいつも仕事があるとは限りません。

3人の姉は極貧のため、それぞれ中1、小6、小4で中退しました。サットは学校に行く前も帰宅後も家事に明け暮れる毎日です。週末も家事と近隣農家に手伝いの仕事があれば、それを優先します。そして1日200円程度の収入を得て、それを家計の足しにしています。母とサットに仕事が無く、家に食料もない場合は、森に入って食べるものを探します。農繁期には日雇いの仕事で忙しく、学校に行けない日もあります。英語が好きで、将来は英語の先生になる夢を持っていますが、果たして実現できるでしょうか・・・。

ラオス | 中学奨学金を申請している小学5年生の生活

力を合わせて家族を支え合うきょうだい

シーラは小学校5年生。3人きょうだいの真ん中で、サラワン県の小学校に通っています。お姉さんは中学校に就学しましたが、お母さんが亡くなったため、中1で中退してお母さんに代わって家族の面倒を見ながら、所有している小さな田んぼで働いたり、牛が食べるのに必要な草を刈る日雇い仕事などを行っています。収入は月1,400円ぐらいですが、いつも仕事があるとは限りません。

家族で小さな田んぼを耕していますが、家族が食べる4か月分のお米しか取れません。しかも、52歳のお父さんは耳が聞こえず、あまり仕事ができないため、お姉さん、シーラ、小4の妹の3人が力を合わせて田植えなどの農作業をします。農繁期になるとシーラも妹も学校を休んで農作業をし



す。また、水汲みと家の財産である豚にえさを与えるのもシーラの朝の仕事です。食べ物がなくなりそうになると、近くの森に入って見つけて野草を食べるか、それを市場で売って購入してお米を食べます。「私たちの生活が貧しいのは、教育がないから。息子のシーラには、このままできるだけ勉強をつづけてもらいたい」とお父さん。シーラは先生になる夢を実現するために中学にも行きたいと思っています。



2016年度 カンボジア・ラオスの奨学金について

締め切り
7月20日

カンボジアとラオスの新規の奨学金は2016年度から中学校のみになり、1年間の奨学金は14,400円となります。現在、最終学年（カンボジアは小6、ラオスは小5）をご支援されている方は、その奨学生の中学就学も継続支援できますが、事前に中学就学を調べることはできません。お振込みをされた後、その子が中学に就学しなかった場合、別の中1の奨学生をご支援していただくことになります。現在、小学生をご支援されている方は、卒業までそのまま1万円でご支援できます。

2016年度のカンボジア・ラオスの奨学金の締め切りは7月20日を予定しております。

更なる夢は、故郷発展の人材になること

1990 年支援開始の友添さん（大阪在住）の「奨学生 5 人の消息を知りたい」という熱い思いに応えるため、タイ事務局に調査を依頼したところ、ようやく 1 人の消息が判明。

現在タイ政府教育省人事・労務管理部勤務の元奨学生ソンポンさんは、ドナーの友添さんに感謝の手紙を送ってくれました。

ソンポンさんからのメッセージ

タイ東北部シーサケート県の小作農家庭に生まれ、家計は非常に苦しかったのですが、教育の大切さを理解する両親は子ども 3 人が学校で勉強を続けられるように必死に働いてくれました。幸運にも 1999 年から中学 3 年間、友添さんが奨学金支援をしてくださったので、家族の経済的負担を減らすことができました。今まで奨学金支援者のことを忘れたことはありません。現在私がやりがいのある安定した仕事に就くことができたのは、奨学金で中学を卒業できたからです。

中学卒業後は、学生ローンと食堂などでアルバイトしながら高校と大学を卒業しました。働きながら学業を続けることは大変でしたが、学校の教師たちが「困難な状況下でも頑張り続けなさい。より良い教育があれば、より良い将来が待っているのよ。だから最大の努力を続けて将来に目標を持ちなさい」と常に励ましてくれました。

現職場で様々なスキルや経験を積みながら大学で修士号を取得し、いつか故郷に戻り、教育の普及に貢献できるような人材になりたいと思っています。

最後に、奨学金支援者の友添さんに、心から感謝の気持ちをお伝えし、ご健康と幸福を心から祈っています。



ダルニー奨学金を受給していた中学時代のソンポンさん



タイ政府教育省職員として働く現在のソンポンさん

友添さんから ソンポンさんへのメッセージ

貴方からのメッセージにとっても感謝しています。中学卒業後ご自身の努力で高校大学と進学され現在はタイ政府職員となられ、将来は生まれ故郷の発展に貢献できる人材になるために日々努力されていることに、わが子の成長の様に嬉しく思うと共に誇らしく思っております。また、そのような貴方の成長と可能性の拡大に、ささやかながらも力になれたことに心より感謝しています。

私が支援者になった理由は貴方の学校の先生同様「より良い教育があれば、より良い将来が待っている」という気持ちからです。私の力など微々たるものですが、その私でも、もしかしたら一人の子どもの可能性を伸ばす力になれるのではないかと考えたのです。今後の貴方の活躍と幸福を心から祈っております。

最後に、このような素晴らしいご縁を結んでいただいた事務局の皆様に、心から感謝いたします。

友添さんは今回元奨学生の消息が判明した感動をご友人に伝えたところ、2 名の方が深く共感してくださり、「教育支援で、途上国の子どもたちの未来が広がるのであれば素晴らしい。その事実に関わりたい」とタイ奨学金支援者になってくださったそうです。

「ダルニー通信」読者の方々へのお願い：周りのご友人やお知り合いに、ダルニー奨学生について語り、一人でも多くのメコン 5 カ国の子どもたちが奨学金支援をきっかけに、ソンポンさんのように将来を切り拓くことができるように「奨学金支援者の輪」拡大のお手伝いをして頂ければ幸いです。

自宅はサワンナケート市からトラックで5時間、その後、山道を歩いて3時間。

家がとても貧しかったので、姉妹はだれも小学校に行かなかった。お兄さんも小3まで。

家にお金がなかったので、お寺に住み込み、毎朝4時に起きる生活をしながら高校を卒業。

村にはいまだに電気が通っていません。



左からシチャンさん、少数民族教師養成事業担当の志賀（民際センター職員）、リックさん

今年の新入生、シチャンさんをご紹介します！

シチャンさんはサワンナケート県の少数民族カタン族が暮す村の出身です。彼の村に行くためには、教師養成大学のあるサワンナケート県中心地からトラックの後ろに乗って(バスが通ってないので)5時間、その後は山道を3時間歩くことになります。今でも電気の入っていない山奥の村で、シチャンさんは7人兄弟の3番目として生まれました。

小学校は遠かった所以、シチャンさんは10歳になってようやく学校にいきましたが、勉強が大好きだった彼は、家族の中で初めて小学校を卒業しました。お兄さんは小学校3年で中退、姉妹たちは学校に通ったことがありませんでした。

何とか中学校に行きたかったシチャンさんは僧侶になることにしました。というのも、僧侶になると無料でお寺に住み、食事ができ、学費を出してもらえるからです。しかし、毎朝4時半に起床して、同じ年頃の子どもたちと遊ぶこともできず、非常に厳格な規律に従わなければいけませんでした。お寺で厳しい生活をしながら学校に通い、なんとか高校教育まで終えることができました。そして今年、民際センターの奨学金をもらい教師養成学校に入学し、お寺から出て通常の学生に戻りました。貧しい家庭で生まれても、強い意志さえあれば人生を変えることができると信じているシチャンさんは、教師になって故郷の村の子どもたちに希望を伝えたいと言います。

カンボジア自転車プロジェクト

通学に自転車が 必要な理由



Ly Lourn校長



カンボジアには現在、7,051の小学校、1,249の中学校、455の高校が在ります。自治体の数と学校数の比較で言えば、中学校は1町当りにおよそ1校、1郡だと8から9校、そして高校は1郡当り1～3校ということになります。

上記のデータは、中学校は生徒の自宅から遠いということをはっきりと示しており、交通機関や寮の不足、生徒の家族の居住環境などにより、中学校への就学率は低くなっています。2014年から2015年の就学年度における実際の就学率は、中学で53.3%、高校で24.2%となっており、中退する率は、中学で21.0%、高校で27.0%となっています。

2007年に開校した CHBAR AMPOV 中学校の Ly Lourn 校長は、「本校は5つの村から生徒を受け入れていますが、村の95%は農家であり経済的にも厳しい人たちだ」と述べています。

Chbar Ampov 中学校の元には5つの小学校がありますが、その内4校は7kmから11kmの距離に在ります。およそ70%の生徒はその学校で勉強を続けることができますが、30%の生徒は、自転車が無いために中退せざるを得なくなっています。

Lourn 校長は、田舎のエリアの生徒にとって自転車は非常に重要であるとも述べています。自転車を持っていない生徒達は、中学や高校で勉強を続ける機会を損なっているのです。

ソック・アマラは12歳の7年生です(写真右上)。彼女には4人のきょうだいがあり、彼女が一番年上です。アマラの父親はずっと前に亡くなり、母親は再婚して子どもたちの面倒をみなくなりました。アマラと妹や弟たちは、別れて暮らしています。彼女は祖母と暮らしており、他の

きょうだいは叔父と暮らしています。

彼女の家は学校から6kmも離れているため、今通学に問題を抱えています。彼女は毎日友達の前で一緒に乗って通学していますが、友達が休みの時は、彼女は歩いて通学するか、休みを取るしかありません。このため、勉強に支障をきたしています。

アマラは将来先生になりたいと思っています。そして、学校に毎日通えるように、自分の自転車が欲しいと思っています。高校に進学して勉強を続けようとするれば、高校は中学からさらに8km離れているため、より通学が難しくなってしまいます。彼女のような子どもたちはカンボジアにはまだまだ沢山います。ぜひ、ご協力よろしくお願いいたします。



自転車プロジェクト概要

支 援 国: カンボジア・ラオス

寄付金額: 1口18,000円

提供時期: ラオス(10月と2月の年2回)

カンボジア(お申込みから3～4か月後)

報 告: 写真付ポストカードをお届けします。

*お問い合わせは担当の関口まで
(info@minsai.org)

Stop Drop-out Student 中途退学の可能性が高い生徒支援

タイは経済発展の優等生ですが、その影の部分として地方の農村部にたくさんの土地無し農民がいて、田植えや刈り入れの時に日雇い労働で日当を稼ぎ、農閑期に都市部に出稼ぎに行くという生活を繰り返しています。彼らの子どもたちの中には、せっかく中学校に入学できたものの、親の失業や怪我、蒸発などで、ある日突然、退学せざるを得ないケースがしばしば見られます。中学入学時に奨学金を申請したが、その枠に入らなかった生徒も、同様の理由から中学校を退学しなければならない状況に陥ります。

ダルニー奨学金の特長の1つは、奨学金担当ないしは生徒の担当教師がそのような生徒の家庭を訪問して実態を把握し、村長や村人と話し合い、家庭環境の問題に対して解決策を見いだすことができる点です。この特長を活かして、昨年末からこのような生徒が中学校を退学しないように、1学期中に経済的理由で退学する可能性のある生徒には2学期から、2学期以降の生徒には次年度の新学期から奨学金を提供

する Stop Drop-out Student と称する奨学金を試みました。

初年度でこんな例がありました。家庭の事情で退学したある生徒が教師の指導で夜、勉強することになりました。タイには年2回の試験に合格すれば中学卒の資格が得られる制度があり、この制度を利用して中学卒業を目指すということで、この生徒に奨学金を支給することにしました。困難にもめげず勉強したいという生徒に、日本から奨学金と「ころ」を送りたい。こうした支援は、地球の次世代を担う生徒にとって一生忘れ得ぬことになるでしょう。

Stop Drop-out Student の奨学金は、Facebook やメールマガジンでその都度お願いさせていただきます。ご関心のある方はご友人とシェアしていただければ幸いです。また、不定期に中途退学支援に係るメールマガジンを発行する予定です。ご関心のある方は、是非 info@minsai.org 宛にご連絡ください。

ラオスの中一の 教室建設の ご協力をお願い

神奈川県伊勢原市にある三寶寺（さんぼうじ）のご住職、目崎様はここ数年間毎年、ラオスの校舎建設を目標にチャリティー歌謡ショー等を開催し、多く

方々からの浄財を受けて150万円余を集めました。が、ラオスの教室建設にはあと100万円が必要です。ラオスの子どもたちにできるだけ早く校舎を届け、早く皆様に浄財の成果を報告する必要があるということで、今号で皆様にご寄付を仰ぐことになりました。

目崎様からご寄付いただくプロジェクトは、現存の小学校校舎に中学校の教室を中1から1部屋ずつ増築していく方式の校舎建設です。ラオスには小学校が約

8,000校ありますが、中学校は1,000校しかありません。小学校の場合はたいてい1つの村に1校ですが、中学の場合は複数の村から生徒が通うことになります。そこで、複数の村長等、関係者を集めて中学校設立の誘致運動を競ってもらい、一番熱心な地域に中一の教室を建設したいと思います。それを契機として、次年度から村人の熱意で中1に続く中2の教室づくりを期待したいと思います。3年目、4年目も同様に村人が1教室ずつ建設し、最終的に完全校にするのが狙いです。

中学校の場合、各科目の教師が必要で最低5名ですが、過去にこんな例がありました。5名赴任したところ2名が給料をもらい、残り3名は（教育省の予算が乏しく）無給だったのです。理由は新米だから。そこで、村人は先生方の住居や食の世話をしました。村の誘致運動を喚起するのは、村人の熱心なサポートが必要なケースがあるからです。是非とも第一校目のご協力をお願いしたいと思います。

インターネット・フレンドシップ校 \2年目/ 交流事業2016がスタート!

1月の説明会 タイの交流相手校のワン先生が参加

インターネット・フレンドシップ校交流とは、弊団体の支援対象国のひとつであるタイ国の中学校・高校と日本の中学校・高校がインターネットを通じて英語でコミュニケーションを図り、国際交流を促進するものです。

昨年スタートした同交流事業は、初年度にもかかわらず20校が参加しました。手探りで始めた同事業ですが、参加校からは「回数を増すごとに自分達の英語が通じていることを実感でき楽しめるようになった」という声をいただいています。

また、うれしいことに、国際交流基金アジアセンターの助成で開催した「インターネット・フレンドシップ校交流事業 2016」の説明会のスピーカーとして、横須賀総合高校のタイ交流相手校のワン先生を日本へお招きすることができました。日頃、インターネットで日本の学校と交流されているので顔は拝見していましたが、実際にお会いしますと思いのほか身長が高く、温かな人柄が伝わってきました。

説明会の翌日、ワン先生は横須賀総合高校を訪問し、ワン先生の学校とのスカイプ交流に参加しまし



母校の取り組みの様子を説明するワン先生

た。スカイプ画面の向こうではタイの生徒達がワン先生の姿に大歓声。ワン先生が一言話すたびに、大きくうなずいています。だって、いつもは生徒のそばにいて交流指導してくださっている優しいワン先生が、遠く日本から日本の先生や生徒達とともに画面に映っているのですから・・・きっと生徒達の心に残る一日だったに違いありません。

今年度の同事業のプログラムとして、交流のサポートだけでなく、先生方へリアルなタイの学校教育やICT 活用の実態などの理解を深めてもらうため、タ

イ学校訪問旅行や全国会議等が予定されています。

アセアン経済共同体のスタートで東南アジアとの交流がますます必要となってきます。この事業を通じてネットワークを作り、国際感覚を磨き、一人でも多く全世界的視野を持つ国際人が育つことを期待しています。



横須賀総合高校の生徒たちと



性犯罪が多発し、通学を恐れるカンボジアの女子学生たち

国民の約20%が一日1.25ドル（約100円）未満の生活をしているカンボジア。貧困は農村地域の多くの子どもたちから教育の機会を奪っていますが、女子生徒たちはこんな危険にも直面しています。

2013年に国連が発表した調査によると、調査対象のカンボジア男性の約20%が女性を強姦したことがあると回答しています（※）。学生への強姦が多発する背景には、性経験のない女性とセックスすればエイズに感染せず、健康に良いという迷信があるようです。さらに、結婚前に処女を失ってしまうことに対する否定的な社会意識が根強く残っており、被害者の女性が加害者との結婚を強要される場合もあるようです。また、警察に通報しても

適切に処罰が行われないケースも多いと言われています。このような状況で、人影が少ない農村の女の子たちが何キロも離れた学校まで自転車や徒歩で通学するのは非常に危険です。このため、娘の身を心配して学校への就学を諦めさせている親も少なくありません。

昨年からスタートした女子寮は学校内または近辺に建設することで、多くの女子生徒が安心して通学することができます。皆さんのお陰で、すでに2棟の女子寮を建てることができましたが、まだ女子寮を必要としている学校はたくさんあります。

ご支援を希望される方は資料をお送りしますので、担当の志賀までご連絡ください。

※レポート名 “Why do some men use violence against women and how can we prevent it? Quantitative findings from United Nations multi-country study on men and violence in Asia and the Pacific.”

E-mail address と Facebook のご協力

インターネットの急速な普及で、携帯もしくはスマートフォンから支援対象国の地方の学校へアクセスすることが可能になりつつあります。タイでは全ての奨学金対象校でコンピューターが整備され、各学校では生徒情報や写真をインターネット上で処理しております。

弊センターが海外の事務所を経由せず直接各学校にアクセスする時代が数年後に来るかもしれません。生徒たちも自分のメールアドレスをもつ時代が到来することでしょう。そうなれば、随時現場の状況等を電子データで皆様へ報告できることになります。

民際の奨学金の特長は、学校を通して奨学生を選考し

ていることですが、その学校と直接インターネットでやり取りする場合、問題となるのは言語です。しかし、相互に母語が英語ではないので、英語のレベルは同じぐらい。拙い英語でコミュニケーションが可能ではないかと思います。

奨学金の報告書や写真は現在、印刷物をお送りしていますが、将来はご希望の方に電子データで送付することも考えております。今から、インターネットでより多くの情報を提供していきたいと考えておりますので、メールアドレスをお持ちの方は是非とも info@minsai.org 宛にご連絡ください（ある方は、電子データのおかげで自分の活動を友人に紹介するのに非常に便利で、「ダルニー仲間ができた」との報告がありました）。また、民際 Facebook への、「いいね」、「シェア」のご協力を宜しくお願い致します。

バレンタイン・チャリティーコンサート

MS&AD ホールディングス 浜 一平

去る2月19日、三井住友海上駿河台ビルの大ホールにおいて、MS&AD ゆにぞんスマイルクラブと MS&AD 軽音楽部の共催による「バレンタイン・チャリティーコンサート」を開催いたしました。

1996 年に始まりましたこのコンサートも、早いもので第 21 回を数える歴史あるイベントとなりました。本イベントでは、当日のチケットの売上金に、当社グループ各社の社員・来場者からの募金も上乘せし、その全額をダルニー奨学金として寄付させていただいており、前回までに計 436 名の子どもたちに総額 1,345 万円の奨学金を支援してまいりました。



今回のコンサートにおきましても多く皆さまのご来場・ご支援をいただき、最終的に約 153 万円を寄付することができました。この寄付金により、新たに 32 名の子どもたちに奨学金を贈呈することができる運びとなり、累計支援人数は前回までに支援した子どもたちとあわせて 468 名となりました（寄付金の累計は 1,498 万円）。音楽を楽しみながら、このような形で子

どもたちの支援ができることに、私どもも大変嬉しく思っております。

さて、今回のコンサートには、当社グループ各社の社員を中心に構成される 3 組のバンド（総勢 17 名）が出演いたしました。また、当社グループのチアリーディングチーム「ドルフィンズ」や三井住友海上管弦楽団とのコラボレーションも実現することができ、大変盛況のうちに幕を閉じることができました。ありがとうございました！

来年も多くの皆さまのご来場・ご寄付をお待ちしております。



社員のボランティア活動を通じて、 子どもたちの学びの機会を支援しています！

三菱商事の社会貢献活動は 1973 年に始まり、「社員参加」と「継続性」をキーワードに国内外で地球環境、福祉、教育、文化・芸術、国際交流・貢献、の分野を中心に、活動を行ってきました。社員一人ひとりが社会貢献に対する意識を高めていくことが重要と考え、ボランティア活動への参加を促す様々な取り組みを行っています。

たとえば、社員のボランティアを、参加回数に応じて「トークン」（仮想通貨）として貯め、まとめたトークン数に応じた金額を、会社が福祉、教育、環境関連の NPO・NGO に寄附する仕組みなどもその一つです。その一部は、世界の子どもたちへの教育や生活改善の支援金とされており、ダルニー奨学金にも充てられています。

社内のボランティアは、協働先の団体と打合せの上、昼休みや就業時間後を利用して、週に3～4回されておりますが、現地語の翻訳シールを貼ってアジアの子どもたちへ届ける絵本製作、目の見えない方にご利用いただく点字シール製作、使用済切手の整理、など様々です。

また、8 月と12 月には、本社ビルのエントランスホールでチャリティーバザーを開催し、民衆センターをはじめ協働先の各団体にフェアトレード商品・雑貨・食品などを販売いただき、社員は購入での支援と共に販売補助員として参加しています。

ダルニー奨学金へのご支援は、2008 年に開始しました。経済的貧困のため教育の機会に恵まれていない子どもたちを支援する国際教育里親システムで、1 対 1 でつながる教育支援であることに賛同して、ご支援を継続してきました。これまでの支援の合計は 465 人分に達しました。

毎年、年度末には写真つきの証書で報告を頂いていますので、社員のボランティア活動の積み重ねが、子どもたちの学びの場の提供につながっていることを実感出来ます。引き続き、ご支援を続けていきたいと思えます。



点字製作



絵本製作



チャリティーバザー

アンチョビ・ロン 〔アンチョビのディップ〕

材料

(1人前)

オリーブオイル 大さじ2

にんにく 3片

A ホムデーン (又はアーリーレッド) 3個 (1/8個)

プリッキーヌ (生唐辛子) 2～3本

ココナツミルク 100cc

アンチョビ 20g

B ココナツシュガー (又は砂糖) 小さじ1/4～1/2 (お好みで)

シーズニングソース (又は薄口しょうゆ) 小さじ1/2

黒胡椒 少々

生野菜 適宜

茹で野菜 適宜

野菜の天ぷら 適宜

作り方

- 1 にんにくとホムデーンはみじん切り、プリッキーヌは輪切りにする。
- 2 小鍋にオリーブオイルを入れ、Aを入れて弱火で炒める。
- 3 香りがしたら、ココナツミルクを加えて混ぜ、アンチョビを加える
- 4 Bの調味料を入れて2～3分煮る。味をみて調える。
- 5 器に盛り、黒胡椒をふる。
- 6 好みの野菜を添える。



Point!

- タイではガピという、オキアミと塩を発酵、熟成させた調味料で作る料理です。
塩辛にも似た風味なので、手に入りやすいアンチョビで作りました。
- 付け合せの野菜はご自由にどうぞ。生野菜、茹でた野菜、野菜の天ぷら、何でもよく合います。
- 少し辛いディップなので、かぼちゃやさつまいもなど、甘い野菜がひとつあるといいですね。



西大路有紀子

1995年よりタイ料理を学ぶ。東京池袋の自宅で料理教室を主催。2013年よりチェンマイでベジタリアンタイ料理を学ぶ1996年よりダルニー奨学金を支援。

支援者のお志を社会貢献に変えて末永く伝えていく

私の特別教育基金

1口100万円から

民際センターでは、支援者の想いを確実に、そして簡単な手続きで末永く伝えていくことができる「私の特別教育基金」のご寄付を募集しています。当基金には、2つのタイプがあり、前号では永続型（元本を取り崩さず、その運用益の中から永続的に教育支援事業等に活用する）について簡単にご紹介しましたが、今回は、もうひとつのタイプ、期間限定型についてご案内します。

期間限定型とは

期間限定型は、寄付者のご意向に従って、3年間、5年間、10年間などのように期間を定め、その期間内に元本と運用益の両方を年毎に活用して教育支援事業に役立てて使い切ってしまうタイプです。

永続型のように支援は永続的に続くものではありませんが、永続型に比べ毎年活用できる金額が大きく、確実に、早く支援活動に役立てられることで、より支援の手応えを実感していただけることと思います。

支援例 1

タイの中学生へのダルニー奨学金支援

支援者Hさんのご意向は、経済的に恵まれぬ中学生を支援するダルニー奨学金として役立てたいとのことでした。この基金により、23名が中学を卒業するまでの3年間の奨学金を受けることになりました。Hさんの申込書には「タイの東北地方の学校を訪ねたときの子どもたちの輝くひとみが忘れられません。ひとりひとりの子どものひとみをもっと輝きますよう願っています。」と基金に託す想いが書き添えてありました。

支援例 2

少数民族教師養成事業への支援

教師を志望するラオス少数民族出身の若者が教師養成短大に入学してから卒業するまでの2年間、奨学金を提供して支援するために活用されます。支援者のAさんは、この基金で2年間続けて年2名の新入生を卒業するまで（計4名）支援する予定です。

私の特別教育基金

- ご希望のお名前がつけられます
- 基金のご寄付は税制上の優遇措置が適用されます
- 基金で支援する事業はご意向に沿って決められます
- 運用実績や活用内容の報告書を年1回お届けします
- ご寄付の金額は原則、1口100万円から（追加の積み増しは金額を問いません）



支援を受け教師の夢が叶った少数民族の女性

*詳細につきましては、お気軽に民際センター事務局（TEL 03-6457-5782）までお問い合わせください。



STUDY FOR TWO ラオス視察旅行

今回のスタディツアーで知りたかったことを知ることができ、新しい考えも生まれました。この経験をばねに、もっとたくさんの子どもを支援できるように自分のできることを精一杯したいと思います。

ラオスの現実を見て

駒澤大学2年 新幡知広

STUDY FOR TWOに加入して約2年が経った3月、初めて支援先のラオスに行きました。団体加入当初からラオスに行かなくては、と思っていました。支援している以上、自分たちが人生を変えているであろう子供たちの姿と生の声を聞きたいと思ったからです。さらに「子供たちは本当に勉強したがっているのか」「支援が自己満足に過ぎないのではないか」という疑問を解決したかったからでもあります。

ラオスの人たちは、厚いもてなしをしてくれました。まるでヒーローみたいだと感じました。村についた時の花道での歓迎と止むことのない拍手。種類豊富な独特な料理。夜が更けても終わらない歓迎式とダンス。そして何度も聞いた「コップチャイ(ありがとう)」という言葉。私達が感謝、歓迎されているのは聞くまでもありませんでした。

しかし、それとは裏腹に、厳しい現実を見て苦しくもありました。勉強道具を持っていない子供、学校に行けていない子供、勉強したいと願っているのにできない子供。五感で感じたすべてのことが衝撃でした。STUDY FOR TWOの支援人数は年々増えていますが、それでも足りません。僕はやっとスタート地点に立ったような気分になりました。

子どもたちの笑顔

広島大学1年 脇村友紀

東南アジアへの初めての渡航で、お腹を壊したり暑さにやられたりしないかなあ、などいろいろな不安がありました。しかし、ラオスの村に着いて子どもたちがつくってくれた花道に迎えてもらった時、そんな不安は吹っ飛び、嬉しいような、ちょっと照れくさいような気持ちになりました。

子どもたちは、初めて目にする日本人に緊張しているようでしたが、一緒にボールで遊んだり、折り紙を折ったり、大縄とびをするうちに、きらきらした笑顔を見せてくれるようになりました。帰国して1ヶ月経った今でも、あの笑顔は目の裏に焼き付いて離れません。

ラオスに行って率直に感じたことは、自分たちの支援はまだまだ足りないということでした。現在、支援として、学用品を支給させていただいていますが、支援人数が十分でないと感じました。また、学用品だけじゃなくて、もっと勉強をする環境を整えることも必要だと感じました。

「30周年記念誌」発行に向けてご支援のお願い

きたる2017年4月に、公益財団法人民際センターは、活動開始以来30周年を迎えます。30周年に向けての活動計画は現在、検討中ですが、その一環として、「30周年記念誌」を発行することになりました。

秋尾理事長の人生と民際センターの活動とを具体的なエピソードを中心に、カラー写真と文章とで振り返り、今後の活動の方向についても触れていきます。すでにドナーになっていただいている方にはもちろん、これから民際センターのことを知っていただくことになる方に、これまでの民際センターの活動理念と今後の民際センターの活動のビジョンを分かりやすくお伝えするツールになることを目指しています。約250頁のソフトカバー本、500部の発行予定で、総額約350万円の予算が必要となります。趣旨にご賛同いただける方は、民際サポートプログラム(出版)として一口1万円のご支援をお願いいたします。ご支援いただいた方には、もれなく「記念誌」を贈呈させていただきます。

福岡市の国際協力フェスタ

「地球市民どんたく 2015」に参加しました



ブースであいさつをする世話人の山里さん

「地球市民どんたく」は福岡の、主にアジアを活動対象地域としている NGO が集まり、その活動内容などを市民にPRするイベントです。福岡ダルニー連絡会も有志で参加し、ダルニー奨学金をPRしました。当日は中村学園女子高等学校インターアクト部の皆さんにも手伝っていただきました（右下写真は同校の生徒たちが民族衣装コーナーで衣装を借りてポーズ）。他には水汲み体験コーナー、各国のお茶コーナーなどがあり、大変賑わいました。我がブースにも多くの市民が訪れ、用意したチラシやリーフレットも足りないくらいでした。福岡ダルニー連絡会に参加していない（地元の）ドナーの方も来ていただいたり、奨学金に興味を持ち、募金してくれたイベント・スタッフも現れたりと楽しい一日でした。

福岡ダルニー連絡会では、毎年「地球市民どんたく」が近づくと、私（会世話人の中里）が会員にメールマガジンで協力と参加を依頼し、アイデアを募ります。会員は現在約20名。民際事務局にパンフレット等の資料の郵送と、県内のダルニー支援者にイベント開催のハガキを出してもらうようにお願いします。

3月9日、通常理事会及び臨時評議員会が開催されました

3月9日、東京「アルカディア市ヶ谷」の会議場に於いて、平成27年度第2回通常理事会が開催され、理事全員の出席の下、平成28年度の事業計画書及び収支予算書等の議案が全会一致で承認されました。理事会に引き続いて開催された臨時評議員会では、平成28年度の事業計画書及び収支予算書等の報告が行われました。



理事・評議員・監事

板倉ラオスの会の歩みを振り返る 校舎の贈呈以来、2年毎に10回訪問 村泊したパクトン村との交流

板倉ラオスの会 飯塚英夫



パクトン校



「板倉ラオスの会」事務局長の栗原さん（右）と校長先生

“Think global, Act local”（地球規模で考え、足元から行動せよ）という言葉があるそう。我が会も幾分それに似ている気がします。町企画の講演会で、世界には学校もなく勉強がしたくてもできない子ども達がいることを知り、心を動かされた町民の中に何かをしようという動きが生まれました。時の町長も私人として20年間、その活動に係ってきた一人です。

私達の活動の第一歩を押してくれたのは、民際センターの秋尾氏であり、その後もパクトン村選定、学校建設、隔年の訪問など、きめ細かな仲立ちをしていただきました。

そして、1996年から2015年までの間に10回パクトン村を訪問し、村の変遷を垣間見してきました。教育環境の劇的な変化こそ見えませんでした。就学率や中学への進学率は改善されてきているそうです。生活環境は年々向上し、電気、水道、電話などが普及してきました。多くの子ども達から勉学への熱意が感じられたし、また、夢や希望を意識し始めているようにも感じられました。

昨年、パクトン村を訪れたとき、数年前まで奨学金を提供していた子ども達が中学校に通っていました。ある朝、バイクで学校に向かう彼らの後ろ姿を見送りながら、近い将来、パクトン村を引き継ぎ、発展させていく人材になるであろうと確信しました。

パクトンの子ども達の成長ぶりは目覚ましい気がします。幼児が子供に、子供が少年少女に、少年少女は小さな紳士淑女に変身しています。この大切な変貌の時期に誰もが学べる時間と場を提供できればと願って支援してきました。私達にできる事はほんの少しかもしれませんが、できる事を足元からやっていく、それが地球的規模から考えて同じ方向であるならば「進め」信号であると思います。

ラオス訪問は今回で終了となりますが、奨学金を通しての援助活動は継続していくつもりです。民際のスタッフの皆さんに助けていただきながら、「板倉ラオスの会」は歩み続けます。



支援している奨学生と面談



パクトン校の生徒が歓迎の踊りを披露

事務局活用リスト

事務局ではさまざまな資料やサービスを用意して、ドナーの皆様の
お問い合わせやご要望にお応えしています。

※ご利用につきましては、以下の要領でご連絡願います。

地域で奨学金や図書セットを広める活動をしたい

- ① 書き損じハガキ・未使用テレカの収集
- ② 使用済みインクカートリッジの収集
- ③ パンフレットまたはリーフレットの設置
- ④ 不要な本を集めてブックオフに送る
- ⑤ 募金箱を設置したい

お気軽にお電話またはメールでお問い合わせください。折り返し資料などをお送りします。また、ホームページでも紹介しておりますので是非ご覧ください。

奨学生や現地のビデオを見たい

DVDは現地情報満載の広報ビデオ(13分)。パネルを貸し出すこともできます。送料は負担願います。

個人でタイを訪問し、奨学生に会いたい

82円切手を貼った返信用の封筒をお送りください(メール可)。折り返し、資料をお送りします(3~5月と10月、学校はお休みのため訪問できません)。

タイの奨学生と文通したい

- ① 手紙の翻訳
- ② タイの切手購入

- ① : タイ語→日本語に翻訳します。手紙の原本と82円切手4枚を同封して送ってください。
- ② : タイ切手セット(12回分1000円)の代金は郵便定額小為替か現金でお願いします。
82円切手を貼った返信用の封筒も同封してください。
※奨学生の氏名をカタカナで読みたい方は、電話、メール、ファックスでお問い合わせ下さい。

国際事務局でボランティアをしたい

PC入力、DTP経験者、事務作業など。電話またはメールで担当、関口までお問い合わせください。

奨学金の説明を聞きたい

事務局では随時無料説明会を行っています。参加希望の方は必ずご予約ください。

毎年忘れずに送金したい

お申し込みいただければ、銀行自動引落申込書をご送付いたします。

編集 後記

以前にもこの欄で書きましたが、民際センターで働く前、会員800人程度の別のNGOに所属していました。活動地域はパレスチナ難民キャンプ。いわずとした紛争地で、世界中の大手NGOが活動していました。彼らの収入は年数十億円で、支援者数が10万人を越えているNGOもありました。800人の会員のNGOが彼らと伍して(?)現地で活動するには補助金や助成金に頼るしかなく、その申請書や報告書の作成が大変でした。こうして、市民運動として多くの人にアピールして支援金を募るという、NGOの基本的な側面から遠ざかっていきました。さて、民際センターは「1対1の顔の見える支援」を看板に、助成金等よりも一般の方からの寄付を募って活動をしています。しかし、リーマンショック以後、支援者は減少の一途を辿り、現在は2007年の半分(約5,000人)になりました。こうした厳しい状況下、今年7月からAC Japanの支援キャンペーン団体に採用されることが決まりました。知名度が上り、寄付が増え、1人でも多くの子どもが奨学金を得て基礎教育を終えることができることを期待しています。(富田)



公益財団法人
民際センター

ダルニー通信 第78号 2016年8月1日発行 発行人:秋尾晃正
公益財団法人民際センター 〒162-0801 東京都新宿区山吹町337 江戸川橋東誠ビル5F
TEL: 03-6457-5782 FAX: 03-6457-5783
Eメール: info@minsai.org ホームページ: http://www.minsai.org/
振替口座: 00160-7-664928
(この口座は振込手数料免除口座です。必ず郵便窓口にてその旨お伝えください。)

少数民族教師養成事業

小学校教師になるという夢が叶いました！

前回のダルニー通信で紹介したラシさんは2015年、サワンナケート教師養成大学を卒業し、同年10月からサワンナケート県内の母校で小学校教師になりました。



小学校の前に立つラシさん



ラシさんが教えている小学校

る程度話せるようになった小学校3年まで、学校では殆どしゃべることすらできなかったそうです。

小学校しか卒業できなかったお父さんに励まされて一生懸命勉強したラシさんは、優秀な少数民族の生徒が無料で合宿生活をしながら勉強できるサワンナケート少数民族中高一



子どもたちに教えているラシさん



ラシさんが担当する小2のクラス

貫校に入学。さらに民際センターの奨学金で教師養成大学で勉強をつづけることができました。

ラシさんは現在、母校のナポンケン小学校で勤務しています。授業でラオ語とマコン族の言葉で説明するので、生徒達は授業を理解することができます。「出身村で夢見た教師になれてとても幸せ」というラシさん。今度は村の子どもたちがそれぞれの夢も叶えられるように頑張りたいと抱負を語っていました。